

**第Ⅲ部 宮城職業訓練支援センター／
宮城職業能力開発促進センターの
アンケート調査結果（部分）（粗集計）**

第Ⅲ部 宮城職業訓練支援センター／ 宮城職業能力開発促進センターの アンケート調査結果（部分）（粗集計）

1. アンケート調査について

本報告書は、職業能力開発施設における大震災の被災対応から復旧・復興までの状況を調査した結果をまとめたものだが、調査の際には、調査対象となった各職業能力開発施設から調査項目に関連する多くの情報を幅広く頂いた。

宮城センターからは、今回の JILPT の調査への協力として、大震災の発生前後に同センターと関わりのあった人々に対するアンケート調査の回答票の提供をいただいた。アンケート調査は、JILPT のヒアリング調査項目と合致する内容であり、回答票は 271 人分で、回答者は次の 4 つのグループに分けられる。

すなわち、① 訓練生（大震災が発生したときに同センターで職業訓練を受けていた訓練生）、② 現訓練生（大震災の後に入所して平成 24 年 8 月（JLPT が同センターに実施したヒアリング調査と同時期）に在籍中の訓練生）、③ 大震災当時に宮城センターの職員であった方、④ ③には属さないが、調査時点で宮城センターの職員である方、の 4 グループのいずれかに属する方々である。

本報告書では、この 4 つのグループのうち、①と②について、全質問項目の中から基本属性ほか若干数の質問項目を選び、その回答の粗集計の結果をまとめる。①の回答は 48 人分、②の回答数は 161 人分、合計 209 人分である。

なお、その他の項目や③と④のグループの回答を含めて、アンケート調査全体のより詳細な分析は来年度にとりまとめることにしている。

2. 結果の概要

(1) 大震災当時の訓練生の概況

ア、年齢、性、訓練科

大震災当時の訓練生の年齢として記載しているのは調査時点の年齢である。大震災が発生してから 1 年半後の調査なので、大半の者が職業訓練を受けていた当時は、以下の各図表の年齢よりも 1～2 歳若かったことになる。だが、いずれの時点の年齢でも、各科とも 30 歳代と 40 歳代が多く、全体で約 6 割（57.3%）がこの 2 つの年代に属する。そのうち、男性

が81.3%と圧倒的に多く、すべての訓練科に分布しているが、女性はCAD・NCオペレーション、住宅リフォーム技術、住宅診断サービスの3科のみである。実際には当時は、設備保全、住宅リフォーム技術、制御システム技術、住宅診断サービス、生産マネジメント、CAD・NCオペレーション、テクニカルワークの各科のそれぞれに女性が訓練生として在籍しており、住宅リフォーム技術、制御システム技術、住宅診断サービス、CAD・NCオペレーションには5人以上が学んでいた。

とはいえ、やはり男性の訓練生が9割近くを占めており、回答者の性別割合はそれを反映しているといつてよい。年齢層では、女性は図表9では全員が40歳未満であるが、実際には当時の訓練生に40歳代から50歳までの者が存在していた。ただし、男性の方が女性よりも高い年齢層まで分布していることは両図表とも同じ傾向がみられる。

図表7 年齢別・訓練科の当時の訓練生

単位=人、() = %

	30歳未満	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60歳以上	無回答	合計
CAD・NCオペレーション	2	6	0	0	0	0	8 (16.7)
テクニカルメタルワーク	1	2	0	0	0	0	3 (6.3)
ビル設備サービス	0	0	2	3	1	0	6 (12.5)
住宅リフォーム技術	0	2	2	0	0	0	4 (8.3)
住宅診断サービス	0	1	0	0	2	1	4 (8.3)
制御システム技術	1	1	1	2	0	1	6 (12.5)
生産マネジメント	0	0	1	1	1	0	3 (6.3)
設備保全	1	1	3	0	1	0	6 (12.5)
電気設備施工技能習熟	0	2	0	0	0	0	2 (4.2)
電気設備	0	1	1	0	0	0	2 (4.2)
電気・通信施工技術	2	1	1	0	0	0	4 (8.3)
計	7 (14.6)	17 (35.4)	11 (22.9)	6 (12.5)	5 (10.4)	2 (4.2)	48 (100.0)

図表 8 性別・訓練科別の当時の訓練生

単位=人、() = %

	男性	女性	合計
CAD・NCオペレーション	2	6	8
テクニカルメタルワーク	3	0	3
ビル設備サービス	6	0	6
住宅リフォーム技術	2	2	4
住宅診断サービス	3	1	4
制御システム技術	6	0	6
生産マネジメント	3	0	3
設備保全	6	0	6
電気設備施工技能習熟	2	0	2
電気設備	2	0	2
電気・通信施工技術	4	0	4
計	39(81.3)	9(18.8)	48(100.0)

図表 9 性別・年齢別の当時の訓練生

単位 = 人

	男性	女性	計
30歳未満	6	1	7
30-39歳	9	8	17
40-49歳	11	0	11
50-59歳	6	0	6
60歳以上	5	0	5
無回答	2	0	2
計	39	9	48

イ、再就職を目指しての訓練受講中の大震災がもたらした困難

回答者は再就職のために技能を習得しようとして職業訓練を受けていた人々である。前年の10月に訓練期間6ヶ月のコースに入所した場合は、その技能は修得目標のレベルに既に到達していたか、それに近い技能水準にあったはずで、企業の採用面接に出向く等の求職活動に力を入れていたと思われる。他方、2月に入所した訓練生は、目指す技能の基礎部分を覚えたという段階にあった。

このように回答者はそれぞれの技能修得段階で大震災に出会い、そこで職業訓練が中止された。宮城センターは津波による施設の損傷が著しく、実施中の職業訓練はすべて中止とし、施設閉鎖の措置に迫られたことは第Ⅱ部で述べたとおりである。当時、技能レベルがそれぞれに異なっていた訓練生は、被災によってどのようなことが最も困難・負担になったか、また、その最大のことは何であったと考えているかを、次のように把握した。

調査票で、「震災当日及びその直後の数日間の状況について」との項目が立てられており、その内訳として「困難な状況にあって、あなたが最もご苦労されたことや負担だったことはどのようなものでしたか。」との質問がされている。続けて「そして、それは職業訓練や就職活動をする上でそれらの困難は影響がありましたか。影響があれば、どのようなことですか。また、どのように対処されましたか」との質問がある。これらの質問への回答を整理した。

回答は自由記述形式で得られているので、記述内容による分類を次の手順で行った。

最初に、本研究を担当した社会心理学領域の研究者2人がそれぞれ別々にすべての回答者の当該質問への回答を通読した。そして、各回答からそれぞれの中心概念となるキーワードを選び出した。

さらに、それぞれが選び出したキーワードについて、概念が重複するものをまとめて上位

のキーワードを作成した。

ここまでの作業を別々に行った後に、2人がキーワードを持ち寄り、協議して最終的に分類基準とするキーワードを決定した。その結果、分類基準とするキーワードは、①職業活動・就職活動に関する変化、②情報入手・発信に関する支障、③生命維持の危惧（飲料水、食料の不足）、④震災前の生活文化の喪失（電気、ガス、車等の利用不可）、⑤その他、⑥とくになし、となった。無回答があったので、それは⑥の「とくになし」に該当する可能性は高いが、とりあえず「無回答」として別に扱った。また、2つ以上の独立した事柄をあげているものは、多重回答として、すべて取りあげた。質問とは無関係の記述内容のものが1つあったので、それは除外した。

なお、③は飲料水と食料の確保ができなかったことに絞っている。単に電気が止まったことで水道が使えず、不便だった、あるいは入浴ができないことが負担だったというものは、④の中に含めている。

以上の手続きで作成した分類基準によって個票の回答を分類する作業を上記の2人が別々に実施し、その結果を持ち寄った。意見の不一致があったものが数ケースあった。そのため、不一致のものについて、3人目の心理学研究者の意見を求め、3者で意見交換を行い最終的な分類結果とした。なお、この3人目の作業者は、意見を求められるまでは、本研究には一切関与していない。

結果をみると、全体では就職活動・職業活動に関する変化があり、それが困難・負担だったという回答が多い（図表10）。訓練生は離職者なので、これは就職のための活動ができなくなったことを当時、最大の困難・負担だったと考えていることになる。

具体的には、“就職活動に影響したのは、ハローワーク泉中央が閉館。ハローワーク仙台へ行くにも地下鉄一部運休、シャトルバスを乗り継いでいった”、“4月に訓練の中止の連絡があり、今後の進路に迷った。周囲が混乱していて就職どころでなかった”、“訓練が中止になり、就職活動が大変だったがアルバイトや派遣の仕事をするなりして、対処した”、“生きる為に食の確保、移動の為にガソリンの確保等してましたが、内心は就職をどうするかという不安の気持ちをどうするかでした。訓練しようにも訓練する所がないし、就職しようにも就職先もなかったのも、とても不安でした。技能をつける為に学んでいたのも、独学で勉強して電気の仕事につける様に努力しています”、“描いていた予定の全ての変更が必要になって、求職情報内容が偏るようになったので就職活動に影響”といったようなものである。

次は、「震災前の生活文化の喪失」だが、主に電気と自動車に頼る現代人の生活が反映された回答である。“とにかくガソリンがなかったこと。妻が仕事に行くには自家用車しか手段がない。確保に大変苦労した”、“車が津波で流されて行動範囲が狭くなった”といった内容が典型である。

生命維持のために飲料水は欠かせないが、大震災直後には食料よりも飲料水の確保に困難

が多かったようである。

図表 10 大震災直後の困難（当時の訓練生）

単位 = 人、() = %、MA

職業活動・就職活動に関する変化	23 (43.4)
情報入手・発信に関する支障	1 (1.9)
生命維持の危惧（飲料水、食料の不足）	6 (11.3)
震災前の生活文化の喪失（電気、ガス、車等の利用不可）	9 (17.0)
その他	6 (11.3)
特になし	4 (7.5)
無回答	4 (7.5)
計	53 (100.0)

困難や負担だったことには、性別による違いがみられる（図表 11）。サンプル数が少ないので、はっきりとはしないが、女性の方が家庭生活で日常的に家事を行うことが多いためか、就職活動そのものだけでなく、家族全体の食料や飲料水を心配するという面があった。他方、男性の方がガソリン不足で行動できないことを困難・負担の事柄とする傾向が強いように思われる。

なお、「その他」とは、“精神的ダメージが大きい”、“娘を津波でなくし、探したり葬儀まで初めての事が多く精神的、時間的にもきつかった点”、“家に帰っても揺れがおさまらないので、心が折れそうだったので一度、宮城をはなれた”というような内容である。

また、多重回答なので、上記でご家族を亡くされて“精神的、時間的にきつかった”と回答しているケースは、それとあわせて、“（就職活動には）特に影響なし。逆に早く社会復帰しようという気持ちが強くなった”との回答も寄せている。こうした多重回答への分析は、他の質問項目を参照しつつ、今後、深めて行くことにし、本報告書においては、基本的に調査結果の一部分の粗集計のまとめとして、表面で捉えられている範囲で分類し、記載する。

ここで、「情報入手・発信に関する支障」の割合が少ないのに注目したい。これらの人々は、大震災発生時には宮城センターで受講中であったし、当時、宮城センターは職員が警察、自衛隊、自治体、マスコミ等に情報を発信し、また、震災関連情報も停電の中でも周辺の被災状況や自衛隊の救援活動等についての情報をキャッチして、それを訓練生に伝達していたことは第Ⅱ部で記載したとおりである。家族等への連絡に支障があった者は多いはずだが、全体として自らの状態を知ることができ、かつ、自らの所在を外部に発信している実感があったのではないかと思われる。

なお、「情報入手・発信に関する支障」に関しては、次項、「(2) 大震災後に入所した現在

の訓練生の概況」で、大震災時に入所していなかった者と比較したい。

図表 11 性別・大震災直後の困難（当時の訓練生）

単位 = 人、() = %

	男性	女性	合計
職業活動・就職活動に関する変化	19 (43.2)	4 (44.4)	23 (43.4)
情報入手・発信に関する支障	1 (2.3)	0 (0.0)	1 (1.9)
生命維持の危惧（飲料水、食料の不足）	4 (9.1)	2 (22.2)	6 (11.3)
震災前の生活文化の喪失（電気、ガス、車等の利用不可）	9 (20.5)	0 (0.0)	9 (17.0)
その他	4 (9.1)	2 (22.2)	6 (11.3)
特になし	4 (9.1)	0 (0.0)	4 (7.5)
無回答	3 (6.8)	1 (11.1)	4 (7.5)
計	44(100.0)	9(100.0)	53(100.0)

ウ、現在の就職状況と入所から就職までの期間

調査時点で就職している者の割合は全体で、77.1%である（図表 12）。現在の勤務先に就職するまでの期間は図表 13 のとおり平均 11.53 月となる。宮城センターは、大震災によって職業訓練を中止したので、当時の訓練生はそれまでの受講期間の長さとは無関係に一斉に受講期間が終了した。通常の時と異なり、大震災で突然に職業訓練の受講が終わったので、どのような尺度で、訓練受講と就職との関係を見るかは大変難しい。今後、多角的に検討していくことにするが、とりあえず、入所時が平成 22 年であったグループ、平成 23 年であったグループの 2 つに分けて、現在の就職に至るまでの期間をみると、図表 14 のとおりである。

次に、現在の就職状況にかかわらず、大震災が発生した後で最初に就職した時までの期間をみたのが図表 15 である。これをみると、大震災発生 of 平成 23 年 3 月から最初の就職までの期間は入所時期が早い方がいくらか就職までの期間が短い様相がある。

これらの図表から総合的に判断すると、平成 22 年入所の者は大震災当時既に 3 ヶ月以上は在籍していたので、その分を考慮すれば、職業訓練を受けた期間が長い 22 年入所の方が 23 年入所者に比較して幾分は就職までの期間が短く、入所月別にみても訓練期間の長さで就職までの期間の長さには一定の関係があると予想されるといいと思われる。

もちろん、就職希望地によっては被災企業が多く就職困難度が増していたり、訓練職種によって大震災後のいわゆる復興特需との関係が異なることも考えられるし、雇用保険受給者

の場合は失業給付の残日数が影響する可能性があるので、これ以上のことは現段階ではなにも明確には言及できない。今後、個票を個別に読み込んで、他の質問項目での回答を参考に検討する。

図表 12 現在の就職状況

単位=人、() = %

	有職	無職	計
CAD・NCオペレーション	7 (87.5)	1 (12.5)	8 (100.0)
テクニカルメタルワーク	2 (66.7)	1 (33.3)	3 (100.0)
ビル設備サービス	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (100.0)
住宅リフォーム技術	3 (75.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
住宅診断サービス	1 (25.0)	3 (75.0)	4 (100.0)
制御システム技術	4 (66.7)	2 (33.3)	6 (100.0)
生産マネジメント	3 (100.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
設備保全	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (100.0)
電気設備施工技能習熟	2 (100.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
電気設備	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (100.0)
電気・通信施工技術	4 (100.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
計	37 (77.1)	11 (22.9)	48 (100.0)

図表 13 入所から現在の就職までの期間（訓練科別）

単位：度数=人、度数以外=月

訓練科名	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
CAD・NCオペレーション	7	14.43	3.952	9	18
テクニカルメタルワーク	2	15.50	.707	15	16
ビル設備サービス	5	10.60	5.941	1	17
住宅リフォーム技術	3	8.67	8.145	3	18
住宅診断サービス	1	6.00	.	6	6
制御システム技術	4	13.00	4.243	7	17
生産マネジメント	3	9.33	1.528	8	11
設備保全	5	11.60	3.912	7	17
電気設備施工技能習熟	2	4.00	.000	4	4
電気設備	1	14.00	.	14	14
電気・通信施工技術	3	12.67	7.024	6	20
計	36	11.53	5.023	1	20

図表 14 入所から現在の就職までの期間（入所年別）

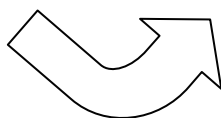
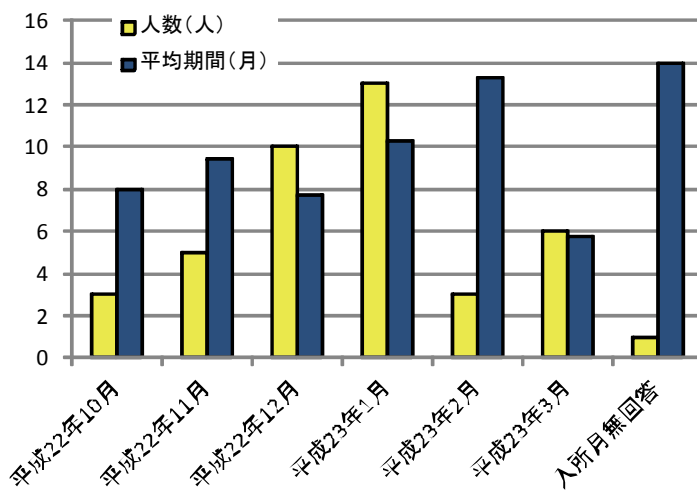
単位：期間 = 月、入所者 = 人、() = %

入所からの期間 (月数)	22年入所者	23年入所者	計
1～3月	- (-)	2 (10.5)	2 (5.6)
4～6月	2 (11.8)	3 (15.8)	5 (13.9)
7～9月	2 (11.8)	3 (15.8)	5 (13.9)
10～12月	4 (23.5)	4 (21.1)	8 (22.2)
13～15月	4 (23.5)	2 (10.5)	6 (16.7)
16～18月	4 (23.5)	5 (26.3)	9 (25.0)
19～20月	1 (5.9)	0 (0.0)	1 (2.8)
計	17 (100.0)	19 (100.0)	36 (100.0)

	22年入所者	23年入所者
平均値	12.53	10.63
標準偏差	4.543	5.377
最小値	5	1
最大値	20	18

図表 15 入所月の大震災時（訓練中止）から最初の就職までの期間

入所月	人数(人)	平均期間(月)
平成22年10月	3	8.0
平成22年11月	5	9.4
平成22年12月	10	7.7
平成23年1月	13	10.3
平成23年2月	3	13.3
平成23年3月	6	5.8
入所月無回答	1	14.0
計	41	9.0



(2) 大震災後に入所した現在の訓練生の概況

ア、年齢、性、訓練科

年齢別、性別の状況は大震災当時に入所していた訓練生とほぼ同じ傾向である。30歳代と40歳代が多く、性別では男性の割合が多く、7割を超える。女性はCAD技術や事業所ネットワーク技術など関連した職種の科に集中していること、年齢的には男性よりも若い年代に多いことも大震災当時の訓練生と同じといえる（図表16、17、18）。

図表 16 年齢別・訓練科別の現訓練生

単位=人、() = %

	30歳未満	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60歳以上	無回答	計
CAD・NC加工技術	9	9	5	1	1	1	26(16.1)
建築CAD技術サービス	8	14	4	1	1	5	33(20.5)
建築設備施工	0	1	4	2	1	1	9(5.6)
事業所ネットワーク技術サービス	3	13	5	2	0	8	31(19.3)
生産設備メンテナンス	5	0	0	1	0	0	6(3.7)
設備保全技術	2	4	7	4	1	0	18(11.2)
電気・情報通信工事	0	6	0	2	0	2	10(6.2)
電気設備施工	3	1	2	2	1	1	10(6.2)
溶接施工	4	4	6	1	1	2	18(11.2)
計	34(21.1)	52(32.3)	33(20.5)	16(9.9)	6(3.7)	20(12.4)	161(100.0)

図表 17 性別・年齢別の現訓練生

単位 = 人

	男性	女性	無回答	計
30歳未満	26	8	0	34
30-39歳	37	15	0	52
40-49歳	28	5	0	33
50-59歳	16	0	0	16
60歳以上	6	0	0	6
無回答	3	8	9	20
計	116	36	9	161

図表 18 性別・訓練科別の現訓練生

単位=人、() = %

	男性	女性	無回答	合計
CAD・NC加工技術	24	1	1	26 (16.1)
建築CAD技術サービス	8	23	2	33 (20.5)
建築設備施工	7	1	1	9 (5.6)
事業所ネットワーク技術サービス	19	10	2	31 (19.3)
生産設備メンテナンス	6	0	0	6 (3.7)
設備保全技術	17	1	0	18 (11.2)
電気・情報通信工事	10	0	0	10 (6.2)
電気設備施工	9	0	1	10 (6.2)
溶接施工	16	0	2	18 (11.2)
合計	116 (72.0)	36 (22.4)	9 (5.6)	161 (100.0)

イ、大震災当時の状況と困難

<何処にいて何をしていたか>

大震災は金曜日の午後3時前に発生した。いわゆる平日の昼過ぎである。例外は少なくないといっても、多くの労働者が就業日の勤務時間帯としている時である。その時にどこで何をしていたかの情報でその者が有職者であることを特定できることがある。現訓練生に対して行ったアンケート調査では、「地震発生時はどこにおられましたか。①具体的な場所(自宅、勤務先、外出先など)。②何をしておられましたか。」という質問がなされている。その回答で、職場または職場との関係の場所にいた、あるいは職業としての行動を行っていたという意味の回答、すなわち何らかの職業についていたことが明らかになる回答と、それ以外の回答にわけて、現訓練生の大震災当時の状況をみたのが、図表19である。

それをみると、全体の77.6%が大震災当時には職業に就いて働いていたことが明らかである。図表中で「訓練中」とあるのは、大震災で職業訓練が中止となり、一時は職業訓練から離れたが、その後、再度、訓練受講が認められたとの注意書きがあった者である。データの精査が未完成なので、今後、他の質問への回答との突合を行って精査を重ね、各欄の数値を確定するが、全体の傾向を知ることは現段階でも可能といえるので、この図表を掲載した。今後、注意して内容を分析して分類しなければならないものには、たとえば、当時は農家だったが被災して職種転換をしたことや有期雇用者で雇用期間が満了して実質的な継続雇用での次の契約を結ぶまでの数日間に被災したことが他の質問から把握されるケースがある。

図表 19 大震災当時の就職状況

単位=人、() = %

	職業活動に関すること	職業以外のこと	訓練中	不明	無回答	合計
CAD・NC加工技術	18 (69.2)	2 (7.7)	1 (3.8)	4 (15.4)	1 (3.8)	26 (100.0)
建築CAD技術サービス	30 (90.9)	1 (3.0)	0 (0.0)	2 (6.1)	0 (0.0)	33 (100.0)
建築設備施工	5 (55.6)	2 (22.2)	0 (0.0)	1 (11.1)	1 (11.1)	9 (100.0)
事業所ネットワーク技術サービス	25 (80.6)	2 (6.5)	0 (0.0)	4 (12.9)	0 (0.0)	31 (100.0)
生産設備メンテナンス	5 (83.1)	1 (16.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)
設備保全技術	14 (77.8)	1 (5.6)	0 (0.0)	3 (16.7)	0 (0.0)	18 (100.0)
電気・情報通信工事	8 (80.0)	0 (0.0)	0 (20.0)	2 (0.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
電気設備施工	9 (90.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (10.0)	10 (100.0)
溶接施工	11 (61.1)	1 (5.6)	1 (5.6)	5 (27.8)	0 (0.0)	18 (100.0)
合計	125 (77.6)	10 (6.2)	2 (1.2)	21 (13.0)	3 (1.9)	161 (100.0)

<大震災直後の困難・負担>

上記の図表 19 のうちの「訓練中」という 2 名を除けば、これらの人々は大震災当時はそれぞれに職場や家庭等の固有の生活空間の特定の場所にいた。そうしたなかで大震災が発生したのだが、当時、有職であったか無職であったかを問わず、いずれにしても現在は失業しており、再就職を目指して職業訓練を受講している人々である。それらの人々に大震災が職業活動にどのような影響を及ぼしたかを検討した。ついては、失業と大震災の関係を直接質問していないが、「大震災が起こった結果、あなたの職業活動になにか影響があったでしょうか」という質問を用いた。その回答状況は次のとおりである。

ただし、大震災と失業との関係があると明確に回答している者とそうでない者があるので、大震災と失業との関係については、他の質問への回答から適切に情報を取り出して分析する必要がある。しかし、ここでは、とりあえず単一の質問への回答で整理した。今後、さらに回答内容を分析してより正確な結果を求める予定である。

大震災当日及びその直後の数日間に最も困難や負担だったことをあげてもらった結果が図表 20 である。

最も多かったのは、「震災前の生活文化の喪失」で、男女ともに回答者の3分の1の33.3%があげている。これは大震災当時の訓練生が男性23.7%、女性0.0%であったので、それと比較するとかなり多い割合になる。

この具体的な内容で、最も多いのは、ガソリンの入手困難と“生活用品などがまったく手に入らなかったこと”など生活用品の不足をあげるものである。

“お風呂に入れないこと、寒いこと、食料が乏しいこと、あちこち動けないこと（ガソリンがない事やお店がやってないこと）、通信手段がないこと、水を確保するのに一日に4時間くらいつかうこと”と、当時の生活のさまざまな面で窮乏したとの変化をあげるものがあつた。なかには、“お金が一番苦労しました”というものもあつた。

大震災発生時には、就職していたという者が多いためか、「職業活動・就職活動に関する変化」は、前節で記述した大震災当時の訓練生に比較すると少なく、男女とも5分の2程度の割合になっている。なにより職場があつて働くことができていた者が多かったためである。求職活動に支障があつた者は含まれないし、被災地にいなかった者も数名だけあるといつたことが反映している。なお、大震災によって職を失つたという者は、この項目を最大の困難・負担になつたこととしてあげている。

「職業活動・就職活動に関する変化」という回答の具体的な内容は、“勤務先が遠く、会社への通勤が困難でした。その事と震災時の会社の対応に不満があり、退職しました”、“まさか、この状況で仕事がなくなるとは思わなかつたので、(片付けまでは何ともなく通常通りだつた)かなりショックでした”、“ライフラインが復旧していないのに、出勤しろと言われた”、“地震により困難な状況になり、会社の上層部からのしめつけは厳しくなる一方でしたが、部署の人間とは結束が強まり何とか状況を良くするようといろいろと工夫しようとしていたのですが・・・”といつたもののほか、“休みがなかつた”といつたものもある。

さらに、ここで注目したいのは、「情報入手・発信に関する支障」である。これは男女ともに大震災当時の訓練生よりも多くの割合を示し、とくに女性は27.8%と多くなつている。大震災当時の訓練生とは異なり、自分一人の力の範囲で周囲の状況と自分の置かれた条件を知るほかに、また、家族との連絡をとることも、自分が一人で対処することを迫られた体験が反映しているのではないかと思われる。停電や電話回線の混雑等で、何も情報を得られなかつたことが災害の不安を増すことになつていたとみられる。

これに該当した回答は、具体的には、“情報の伝達がままならなかつたこと。身内の安否”、“情報（水の配給、公衆電話の設置、お店の开店時間など）の入手。市の防災無線は1日でダウンしたので、FM局が唯一の情報元だつた。隣接する南三陸町の人達がどんどん逃げてきているのに、その情報も混乱していた”、“スグに家族や友人と連絡が取れなかつたこと”、“電気の復旧が遅かつたので、インターネットや携帯電話が使えなかつたこと。町内の公会堂で携帯電話の充電ができると知り、何回か通いました”、“ラジオも車でしか聞けず、ガソリンがなくなつてからは、情報ももたらされなかつたので困つた”といつたようなものである。

なお、「その他」とは、“海側に近づくだけで体調が悪くなる”、“家族内での心理的な齟齬（不安や苛立ち、緊急時における考え方の違い等）”、“身内がなくなったことで、精神的に不安定になり、なにもやる気力がなくなりました”といった心理的な状況について述べたものが多い。“放射能、余震”、“放射線のせいで思うように外に出れなかったことが精神的に辛かった”という不安な心理状態を表現しているものもある。

反対に、“負担とは思わなかった。町内会も機能せず、近所と助け合うことが大事だと思った”や“皆で力を合わせて乗り切ったと思うので嬉しいことではないが貴重な経験ができたと思う”という回答があった。これは困難・負担は「特になし」として分類することがより適切とも思われるが、町内会が機能しなかったことや嬉しいことではないという言葉が書かれているので、通常は生じない問題が起きて、それに対処したことがあると述べていることになるので、とりあえず、「その他」に入れた。

大震災時に訓練生であった者は同じ職業訓練施設の訓練生であり、その大部分は、地震と津波に襲われた時は当該施設の中にいたという条件の同一性があったが、大震災後に入所した現訓練生はそれとは異なり、当時、宮城県内でなく関東地方で働いていた者もあるなど大震災が発生した時にいた場所もその時の行動環境もそれぞれに異なるので、困難・負担だったことには、より幅広い多様性がでてくる。

図表 20 大震災直後の困難（現訓練生）

単位 = 人、() = %

	男性	女性	(性別) 無回答	合計
職業活動・就職活動に関する変化	22 (19.3)	6 (16.7)	2 (22.2)	30 (18.9)
情報入手・発信に関する支障	10 (8.8)	10 (27.8)	0 (0.0)	20 (12.6)
生命維持の危惧（飲料水、食料の不足）	17 (14.9)	5 (13.9)	1 (11.1)	23 (14.5)
震災前の生活文化の喪失（電気、ガス、車等の利用不可）	38 (33.3)	12 (33.3)	1 (11.1)	51 (32.1)
その他	9 (7.9)	2 (5.6)	1 (11.1)	12 (7.5)
特になし	12 (10.5)	7 (19.4)	0 (0.0)	19 (11.9)
無回答	25 (21.9)	3 (8.3)	5 (55.6)	33 (20.8)
合計	114(100.0)	36(100.0)	9(100.0)	159(100.0)

ウ、大震災で職業生活に起きた変化

大震災に遭遇したことによって、個人の職業生活や職業活動に何か変化が起きたか、起きたとすればどのようなものであったかについて、「震災が起こった結果、あなたの職業生活に何か影響があったでしょうか」という質問がなされている。その回答では、161人のうち、無回答が39人ある。これを除いた122人の回答者のうち、何らかの影響があったとする者は、87人（71.3%）である。大震災による影響がとくになかったと回答したのは34人で28.7%、「わからない」と回答したのが1人である。

図表21は、「無回答」と「大震災による影響がとくになかった」を除く回答のすべての具体的な回答である。すなわち、何らかの影響があったとの回答をした者の内訳であるが、そのうち、大震災の直接的または間接的な影響によって離職・退職にいたった者は34人で28.7%である。「その他」の欄には、大震災の後に離・退職したがそれは大震災とは関係がないという者は2人いる。「定年退職」または「一身上の都合」を理由としている。しかし、同じ「その他」の欄にあるそのほかの回答の内容をみると、大震災後の会社側の対応に問題を感じたという表現や通勤が困難になったという表現、被害が大きく働く状態ではなかったとの表現をする者がおり、それらは大震災を契機に日頃は問題にならなかった職場の人間関係や就業条件が表面化し、それも原因の一つとしてその後の離職につながったことは大いに考えられる。大震災の経験が職業観・価値観を変えた者や、被災を人生経験としてプラスに転じたという者もある。

この結果からは、かなりの者がさまざまな形で実際には大震災による影響を受けて離・退職への道に向かっていったといえるであろう。間接的な影響の範囲を広げればほぼすべてといってよい。ただし、影響を受けたと同時に、被災によって価値観を転換するなどの経験をし、自立と自主性を軸にしたキャリア・プランを意識した者も少なくないし、被災後の過酷な状況から脱却するための行動を早期に自発的に起こしている。再就職を目指して職業訓練を受講して、労働市場での自らの価値を向上させる努力を具体的に行っている人々だからと考えられる。

また、大震災という稀有の災難に遭遇したことで、自らの働き方やキャリア・プランを見直す中で、職業活動の社会的意義を意識した者もみられる。“仕事を通しての社会貢献をしたいと考えるようになった”、“地域になにがしかの形で貢献したいと考えるようになりました”といった回答が、現在の職業訓練の受講とどのようにつながるかは、現段階のデータ整理では明らかになっていない。しかし、職業活動の充実が人生の有意義さにつながるのと将来予測を秘めた回答であろうと考えられる。

なお、大震災後に仕事がなくなったという者もあるが、反対に大震災後の地域復興事業に関連して仕事が忙しくなったと回答した者が数名ある。なかには忙しく働きすぎて体調を崩したとの趣旨の回答もあった。未曾有の被害をもたらした大震災は、多くの人々にさまざまな影響を与えたことは、こうしたことから実感される。

図表 21 職業生活への大震災の影響

直接の影響で離職・退職	
被災が原因で離・退職・失職	被災が原因で解雇や強制退社等
<ul style="list-style-type: none"> ・企業の被災により離職。 ・企業の被災のため離職いたしました。 ・(勤務先が遠く、会社への通勤が困難でした。その事と震災時の会社の対応に不満があり、退職しましたように)震災時の会社の対応に不信感がぬぐえず、退職しました。 ・震災がきっかけで体調を崩し、一度は職場復帰をしましたが、結果的に退職する事になりました。 ・被災により離職した。 ・震災以前から転職を考えていたが、企業の被災により会社都合で離職した。就職計画や働く事については考えているが、現実には希望職種や条件など考えるとなかなか見つからない。(それ以前に求人自体が無い。) ・下請けが工場をたたんで仕事が増えるだなんだで揉め退職。 ・被災により離職しました。 ・仕事がなくなって、生活が苦しかった。 ・震災にともなう業務縮小で失業した ・震災の影響で会社の業績悪化でリストラにあった。 ・実家(女川)を中心に震災前は、自営業をしていました。車以外の仕事道具を失ったので、再び就職を志し、業種転換を希望しました。多賀城のポリテクセンターで学ばせんでしたが、IT業界と言う明確な道を選択できました。 ・被災による離職 ・まだ数年先まで同じ職場で過ごす予定であったが、退職して引越をした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・震災の影響で会社の業績悪化でリストラにあった。 ・解雇になりました(震災の影響で) ・働いていた部所が無くなり、ほぼ強制的に退社させられる。 ・クビになりました(会社の都合で) ・契約を切られた。 ・当時の勤務先での仕事が契約更新予定だったが、震災後、自宅待機となり、そのまま終了させられた。震災の影響で正社員の仕事がなかなか見つからずいます。 ・被災により離職した。自己のライフプランを見直すきっかけになった。

つづき-1

間接的影響または原因の一つで離職・退職	
解雇や倒産等	その他
<p>・元々、会社の業績が悪くなかったらしく、職場の片付けが一段落したら、クビになりました。今後は、会社にとって、使い捨ての人材にならない有益な人材になるようスキルアップしようと思いました。</p> <p>・震災による直接、間接的な影響、その後に発生したタイの洪水、円高により、勤務先でのリストラがあり、離職になった。</p> <p>・仕事は忙しくなったが給料も上がらず、椎間板ヘルニアになってしまい離職に追いやられた。</p> <p>・2月就職・3月更新し、継続勤務予定が更新なしとなり、離職した。震災後合格通知を受けた資格で5月からの仕事に応募し、再就職した。</p> <p>・この4月に予告なく解雇された訳ですが、震災も原因の一つになっていると思います。</p> <p>・1年後に解雇されました。</p>	<p>・⑧での情報収集に一役買ったのが地域のアマチュア無線クラブだった。(FM局と市の情報中心)。その活動に感動し、震災後すぐにアマチュア無線免許を取得した。逆に震災時にあまり役に立たず、頼りない職場に嫌気が増し、離職しようと思った。</p> <p>・母の介護の為、会社を退職し、実家に戻るようになりました。今は母が寝たきりから自分の事は自分で出来るまで回復し、食事を用意すれば、日中1人で生活できるまで回復したので、地元で就職先を探しております。</p> <p>・住宅、仮設住宅を建てる為、数年間、休みなく仕事をして体調を壊した。</p> <p>・震災以降、仙台からお客様が減り、関東へ長期出張するよう会社から命じられたが、いまだ仙台での仕事が無く転勤するよう指示された。家庭の事情もあり、転勤ができなかったため退職し、今現在、職業訓練を受講している。</p> <p>・休日出勤・長時間労働・サービス残業が異常なほど増加して、体調不良になり退職した。</p> <p>・県外に就職をしていたが、震災の影響で地元で仕事を探そうと思いました。</p> <p>・受注などが減り、仕事に張り合いがなくなってしまった事が転職を決める後押しになりました。</p> <p>・営業が取れなくて退職した。職を変えるしかないが、長続きできるか不安。</p>

つづき-2

その他(被災と無関係、離・退職以外で就職方針の転換、プラスの影響等)	
<p>・仕事が忙しくなった。</p> <p>・震災復旧工事でほぼ休みなく働いた。</p> <p>・被災特需に会社が走り、仕事がやりづらくなった。</p>	<p>・当時、受けていた職業訓練が途中で中止になり、再就職の計画変更を余儀なくされた。</p> <p>・幸い会社と家が近かったので家族の確認はすぐにできたが、遠い場合会社優先なのか、家族優先なのか、また逃げるのが先か、あと片付けを優先させるのか。NPO等の活動も行ってみても良いと思うが暮らして行けるのか不安が残る。</p> <p>・毎日ムリして出勤していたのに、上司で3月末まで出勤してこない人がいた。給料が出ることをわかっていただろうだ。本社より支援物資がわずかに届いて、昼におにぎりだけ出た。他の会社ではホテルを押さえ、シャワーを使えたり支援の手厚さが違った。見舞金が出たり・・・。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・4週間の仕事の遅れ ・会社の景気は下がった。 ・震災後、1ヶ月位で通常にもどりました。 ・そこそこ大きい企業でしたし、地震後もすぐに勤務していたので特に大きい影響は無かった。ただ、2ヶ月位休みが多かったので若干給料が下がった。 ・長期の自宅待機を経て、職場復帰できました。 ・離職など直接的な影響はありませんでしたが、工場内のレイアウト変更や他工場での間借りの生産など、精神的な負担は少しありました。 ・今現在、就職する場所は仙台市内を考えています。 ・震災前は、通勤時間が多くかかるところでもかまわないというような考えがありましたが、現在はあまり通勤時間のかかり過ぎないところを希望するようになりました。 ・ITやIC製造は震災に弱い事を知り、就職対象外にしました。 ・仙台空港近くの勤務先も、多賀城の自宅も被害が大きく、働く状態ではなかった。 ・とにかく仕事さがさなきゃ、とあせっていた。短期のアルバイトもしました。 ・通勤の事情悪化により、通勤しづらくなった。 ・人に喜んでもらえる仕事につきたいと思った。 ・地域に何がしかの形で貢献したいと考えるようになりました。 ・仕事を通しての社会貢献という意識が強くなりました。 ・震災後、何度かボランティアに被災地に行きましたが、とても悲惨な状況で、胸が痛かったです。できれば復興に関する仕事に就きたいと考えるようになりました。 ・まともな上司がいる会社で働きたいと思った。人の為に役立つ仕事、責任のある仕事をしたいと思った。 ・再就職が困難であること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の頃は働くとか考えてる場合ではなかったのですが、母親が骨折から回復しリハビリが落ち着いたころから就職活動を考え、訓練校のパンフレットを見つけ、応募し現在に至ります。 ・「失業給付を受けている方々が多い」という時期に、臨時に就けました。秋以降給付終了。求人に殺到するという予想があり、不安です。 ・仕事内容への意識の変化。 ・外回りをしていて、地域によって被害の差が大きい。 ・顧客の都合により、受付にキャンセルが発生した(一部) ・仕事から解放されて、免許や資格取得等、色々学ぶことができた。 ・働く意欲がでた。 ・平成23年4月21日から、ある企業が被災した人を優先的に採用(1年間)してくれて助かりました。更新はできませんでした。LPG販売の業界でしたので、住宅リフォームに力を入れた仕事に就職したいと思います。 ・就職活動に専念する。 ・何社受けても採用されず、手に職を身につけ、自分に自信を取り戻し、今後の就職活動や生活をやり直したい ・資格を取って正社員になろうとした。 ・働けるところがあるのはありがたいと思った。 ・契約社員だったので、金銭的な部分で負担が大きかった。正社員で働きたいと考えた。 ・いまだに地震の心配がありますし、徐々に増えてきていますが求人件数も心配です。 ・仙台へ引越してきて、3ヶ月ですが本当に就職できるか、不安が大きくなるばかりです。 ・一身上の都合により、平成24年1月に離職するが震災が原因ではない。 ・建築業が市場縮小していたので転職を考えたが、やはり建築業でやっていこうと思った。 ・身近な友人の家族が亡くなったり、家を失ったりした事を体験して、その日その日を後悔しないように生活しようという気持ちが強くなった。
--	---

<ul style="list-style-type: none"> ・仕事がない。 ・本年、定年を向え退職した。今後の就職活動は厳しいと思う。 ・求職中だったが、完全にストップし、震災復旧の仕事をした。その後、仕事が終わり、現在求職中。 ・就職する気はあったが、震災で採用する企業がなかったのが辛かった。 ・農家の継続が不透明になってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いつ何が起こるか分からないため、働く姿勢への変化が自分の中であつた。 ・天災なのではないが、職種については新たな道も開拓せざるをえないと思っております。 ・主人の就職が不安定になり、私も収入が減ったため(会社が長期休みになった)、働くことに常に不安を感じるようになった。今日明日辞めさせられるかも…etc. ・ありました。
--	---